

新書紹介

韓国人の心

李御寧(イー・オリョン)著 裴康煥訳

学生社 B6判 三〇四頁 九八〇円

今年、Y L A P開催や教科

書検定問題などをめぐり、今までより随分アジアと日本とのかわりを考える機会が多かったと思う。国際交流が盛んになり国際化が声高にいわれるようになって久しいが、日本人には、まだまだ欧米が中心で、アジア軽視の風潮が強い中で、よい機会になった。

アジア軽視は言葉の面にも表われている。英語を知っている人は多く、仏語、独語もかなりいるし、スペイン語、ロシア語もいる。中国語も最近が増えてきた。では、ベトナム語はどうか。タイ語は、ビルマ語は、朝鮮語は……。圧倒的に多いのは欧米語、少ないのはアジアの言葉だと気付く。「今日は」の

さて、日本に最も近い韓国について、私達はどれくらいのことを知っているのだろうか。

「韓国人の心」の著者、李御寧(イー・オリョン)氏は、「縮み志向の日本人」を書いて一躍日本でも知られるようになった人だ。

「縮み志向の日本人」で日本と韓国を比較した作者は、食物や衣裳、歌、遊び、習慣、など五一項目を通して、韓国の風土を著している。欧米や日本との比較もかなりでてくる。例えば、「生かしてくれ」と「ヘルプ・ミー」では、民族的思考方式の違いをみている。助けを求める場合、英国人は「ヘルプ・ミー(Help me)」、日本人は「助けてくれ」、韓国人は「人を生かしてくれ」である。西洋人は「私」を押し立てているが、東洋人である日本人は「私」がなく個人意識が薄い。それに比べて韓国人は、個人の自我意識よりも人間の全体意識に訴える。

いわば集団的な人間意識が強く反映するといえる。だから英語の「私」の位置に、「人」という言葉が置かれると説く。

同じように「われわれ」と

「私」でも、韓国人は「ナ(私)」という語の代わりに「ウリ(われわれ)」という語を用いることが多いと説明している。これも個人意識が不在で、個々人の権利が忘却されているからではないのか、そのため独裁者の黒い手が忍び寄ってくるというのだ。「韓国の悲劇は、その大半が「私」を発見できなかったところにあった。主語を隠して生きてきたために、真正の「われわれ」も発展できなかった」と結んでいる。

食物から考える項目「飲み物文化論」もある。コーラ、ワイン、ビール、紅茶、番茶と比較した「おこげ湯」の味。「熱くも冷たくもないおこげ湯の、その生温い感触こそが韓国人の体温である」という。濁酒も「ウイスキーやバイカルのように強くない。透明でもない……味があるとすれば、「味の無い味」としか呼ぶようない逆説的な味覚である。……熱情を発散させながらも抑制し、泣きながらも笑わねばならず、また従順でありながらも反抗しなければなら

ならず、自国を守りながらも他国の機嫌を窺わなければならなかった。その風俗から、「おこげ湯の味」のようなものが生じてきた」と、自国の飲み物を分析している。

『玩具なき歴史』の項では、韓国には幼い子供に与える玩具がなかったといっている。なぜか「玩具がなかったということ」は子供たちに強い関心がなかったということの意味する。そして子供たちに強い関心がなかったということは、結局、未来にたいするヴィジョンがなかったということになる」といい切っている。

その他にもいろいろな面からのアプローチがあり、韓国民衆の息づかい、つばやきが聞きとれるような印象を与える。南北に分断された国家の一方の民衆の生き方が著わされている。

国際化の大切な視点として欧米崇拜、アジア蔑視でなく、異質なものを認め合うことに、日本に最も近い国を理解する上でこの本が役に立てばよいと思う。

へ都市科学研究室 加藤勝彦